
飛翔節

鋼野タケシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛翔節

【Nコード】

N35540

【作者名】

鋼野タケシ

【あらすじ】

険しいハクオウの谷と山、天を突くほどの巨木に囲まれた大自然。その中に小さな集落があった。名も無きその村は単純に谷の名前を取って、ハクオウの村、ハクオウの里と呼ばれている。ハクオウの村にはある一つの決まり事があった……

【飛翔節】

カンナは落ちこぼれた。

今年で十七になる立派な男子でありながら、飛翔の節になっても竜と心を通わせられずにいる。

ハクオウの里に生まれた男子は幼い頃に、自らの相棒となる竜を選ぶ。

竜は男子と共に成長し、飛翔の節になれば成長した翼を羽ばたかせ、男子と共に大空へ飛び上がる。

竜の背に乗り、空を舞う。そうしてようやくハクオウの子は男として認められるのだ。

それがカンナは、十七にもなって未だに空を飛べずにいる。相棒の竜が彼に心を許さず、決してその背に乗せようとしなかったらだ。

「おい、いい加減に俺の言うことを聞けよ、この駄竜」
色鮮やかな桜色の鱗。透き通るような紅の翼膜。すらりと伸びた二本の角。カンナの相棒であるヒカネは外見の美しさで言えばどの竜よりも優れていた。

だが、その美しい翼が空の上で広げられることはない。

竜は心を許さない相手は決してその背に乗せようとしない。

ヒカネはカンナに少しも懐いていなかった。彼が何と語り掛けようと、背を丸めたまま一日中眠り込んでいる。時々寝ぼけたように視線をさまよわせるが、退屈そうに鼻を鳴らすとすぐにまた眠ってしまう。

昔からちつとも変わっていない。少しばかり図体は大きくなったが、それでも竜の中では小柄で貧弱だ。それに、空も飛べない。
「もう飛翔の節になったんだぞ。みんな飛んでる……俺たちだけだ、

飛べないのは。悔しくないのかよお前は」

ヒカネはわずらわしげに半目を開くと、チラリとカンナに視線を向けた。

ギイ、と短く吠える。言いたいことはそれで終わりとはばかりに、犬のように体を丸めた。

カンナは溜息を吐いて、ヒカネの背中をポンと叩いた。

二人の様子を見て、クスリと女が笑う。

「相変わらずねえ。空、飛びたくないのかしら？」

栗色の髪が風を受けて微かに揺れている。意志の強そうな凜とした瞳。日焼けした小麦色の肌に、引き締まった肢体。

彼女は村の娘たちの中でも群を抜いて美しい。名は二ナイといった。

二ナイは楽しそうにヒカネの背を撫でた。硬い背中の鱗を撫でられ、ヒカネは気持ちよさそうに目を細めた。

カンナは仏頂面を崩さなかった。二ナイにとっては他人事でも、カンナには死活問題だ。

ヒカネと共に飛べるかどうか、自らの人生が掛かっているのだから。

「飛べなきゃお前も終わりなんだぞ？ 飛べない竜子は山に捨てられる……人間の里で育った竜が野生の仲間に認められると思うか？ お前が生きてく為には俺と飛べなきゃならない。わかったら、俺を乗せて飛べ！」

ヒカネの首を掴むと、ぐいと引つ張り無理矢理に立たせようとする。いくら小柄とはいえ、ヒカネは竜の子だ。カンナが力を込めたところで、ヒカネは微動だにしなかった。

面倒臭そうにヒカネが尻尾を振る。カンナを押しつけるように、尻尾をがしと足にぶつけて来た。

「嫌、みたいね」

「……もういい！ 最初っからお前を相棒に選んだのが間違いだっ
た」

ハクオウの男児は十の誕生年を迎える頃、自らの相棒となる竜の子を選ぶために谷を訪れる。

カンナが選んだのはヒカネだった。

美しい鱗を持つヒカネに目を付けた子供は多くいたが、誰が近寄ろうとヒカネは寝てばかりいた。他の竜子たちが値踏みするように男子を見ていたにも関わらず、ヒカネはチラリと目をくれるとそれきり眠り込んでしまう。

勤勉や快活からはほど遠い。だらけきった性質が滲み出ている。その様子を見てまでヒカネを選ぶような子供はいなかった。

カンナはどの竜子にも決められず、最後に余ったヒカネを相棒に選んでしまった。

決して自らが望んだわけではない。誰も選べなかった者同士、余った落ちこぼれが仕方がなく組んだだけ。

だから未だに、心を通わせられずにいる。

落ちこぼれの男と、落ちこぼれの竜。

「お、カンナだ。おい、まだお前飛べないんだってな」

村の広場には、数人の青年たちが集まっている。皆、気分良さそうに明日の狩りについて話し合っていた。

だがカンナが居ることに気付くと、口々に嘲りの言葉を投げ掛ける。

「もう飛翔の節はとっくに来てるぜ？ まあた地上でお留守番かい？」

「なっさけねえ。俺あ十三の頃にや大空を飛び回ってたモンだ」

「おいおい、あんまり言っちゃんなよ。駄目な奴は駄目なんだ。どうしようもないだろ？」

男たちは声を出して笑った。

誰にでも出来ることが、カンナには出来ない。優越感を覚えるのか、連中は揃ってカンナを笑いものになっている。

今まで何度も槍の腕、弓の腕を競い合い、一度もカンナに勝てな

かった男たちばかりだ。自分たちがカンナの上を行っているのが嬉しくてたまらないらしい。

最近では妹のアシユミナでさえカンナを馬鹿にする。「みんな竜に乗ってるのに、どうしてお兄ちゃんは飛ばないの？」と、皮肉たっぷりに言われたのはつい昨日の出来事だ。

カンナは何も言い返さなかった。悔しい気持ちでいっぱいだったが、何も言えずにいた。

竜の背に乗り狩猟に出るのが、ハクオウの男たちの勤めだ。女は男たちの帰りを待ちながら、村と子供たちを守る。

だから、竜に乗れない男は何の役にも立たない。村にとってお荷物以外の何者でもないのだ。

このままでは大人たちの仲間入りをすることも、皆に認められることも出来ない。

「ちよつと、やめなさいよアナタたち！」

ニナイは頬を真っ赤にして怒っている。その姿すら美しく、何人かの男は現れた彼女に見惚れていた。羨望の眼差しで見る男たちをニナイはジロリと睨む。

「カンナは同じ村の仲間でしょう。恥ずかしくないの？　ちよつとくらい自分たちが先を進んでるからって！」

ニナイはカンナに向き直った。表情は変わらない。それでもその目には、弟を叱る姉のような気遣いが見て取れた。

村の男たちがそれを面白く思っていないことはわかっている。だから余計に、カンナに冷たく当たるのだ。

「あなたもよ。そこまで言われてどうして黙っているの？」

慰めるように、彼女の指先がカンナの腕に触れた。

「離せよ。ニナイには関係ない」

彼女の手を振り払い、不機嫌そうに吐き捨てる。

「カンナ……」

ニナイの呼び掛けを無視して、カンナはその場から走り去った。悔しかった。

ヒカネが心を開かないこと。未だに飛べずにいること。彼女の前で恥を搔かされたこと。

すべてが悔しくてたまらなかった。

竜の背に乗って飛ぶ。大人として認められれば、村の戦士として狩りの腕前を磨く。それだけが村の人間に自分の価値を認めさせる方法なのだ。

だと言うのに、未だに竜の背にも乗れない。

ヒカネが心を開かない理由は、自分でもわかっていた。

黙々と走り続ける。入り組んだ森の中を、梢を揺らす風のように走り抜けていく。

自分は村の誰よりも早く走れる。力だつて負けない。腕比べで大人にだつて勝てる。槍を振るえば百人力で、矢を射れば一発必中の腕前だ。

それなのに、竜にだけ乗れない。

森を抜けたその場所は、切り立った断崖絶壁の崖になっている。崖の底は深く、太陽の光さえ届かない。崖は左右にどこまでも広がっている。

ハクオウ谷を抜けるには、この崖を飛び越えるか、さもなくば村の反対側になるオーダイ山を越えなければならぬ。

もう少し暖かくなれば、オーダイ山には梟熊フクロウグマが出没するようになる。梟熊は成竜すら赤子のように捻り殺す凶暴な生き物だ。

梟熊が出没する暖季に山を越えるのは自殺行為だ。雪に閉ざされる寒季には、村から出もせず閉じこもるしかない。

結局、竜に乗れなければ村を出ることも出来ない。

カンナは弱気を払うように頭を振った。村を出る必要などない。竜に乗って、一人前の狩人になれば良いのだ。

意を決すると、崖際に向けてゆつくりと歩き出した。

一步、また一步。視界に底なしの縁が入った途端、心臓の鼓動が跳ね上がった。呼吸が荒くなり、目の前がくらくらする。足が震え、もう一步も進めなくなってしまう。

荒い呼吸を整え、少しずつ後ろに下がった。

高いところに近付くと、恐怖ですくみあがってしまう。

自分より体格の大きい相手にも立ち向かうし、素手で暴れ馬を抑え付けたことだつてある。決して自分は臆病ではない。それでも、高い場所には恐怖を感じた。いつ頃気が付いたかは忘れてしまった。昔からずっとそうだった。

高いところが怖いなど言えば、村の皆にどう思われるかはわかつている。だからカンナは誰にもその秘密を打ち明けなかった。

自分は臆病者ではない。そう言い聞かせ、今まで何度も高所への恐怖を克服しようと努力をした。それでも、どうしても高い場所への恐怖は消えなかった。

竜の背に乗って飛び上がるなど、考えただけで気を失ってしまいかねない。

だが、竜に乗らなければ村の男として認められない。だから乗るしかない。

そう覚悟を決めているというのに、決してヒカネはカンナを乗せようとしなかった。

ヒカネはカンナの弱さに気付いているのだろう。あのものぐさの竜がカンナの目を覗き込む時、その瞳には憐れみの感情がこもっている。

竜子はみな一様に気高く、自分の背を預けるに値する男以外を乗せたりはしない。

だからヒカネはカンナに心を開かず、彼を乗せて飛ぼうともしない。

認められていないのだ。村の民だけでなく、相棒のはずの竜にすら。

残された時間は少ない。飛翔の節は明日で終わりだ。明日の夜、男たちは祭に向けて大がかりな狩りに向かう。

その集団を今まで何度も見送って来た。去年の飛翔節でも、一昨年の飛翔節でも。

もし明日もヒカネに乗れなかったら？

次の節を待つしかない。また仲間たちに馬鹿にされながら、季節が過ぎるのを待つ。

次の飛翔節でも飛べなかったら？ このまま、一生飛べなかったら？

想像もしたくない。誰にも認められず扱われない人生など……

冷たい風が頬を撫でる。吹き抜ける風はやむことなく、カンナの顔を叩いていた。寒さと恐怖に身震いし、谷に背を向けた。

振り向いた先に、二ナイが立っていた。さきほどと変わらない仏頂面で。

「……なにか用？」

カンナは彼女から目を背けた。怯えていることを悟られなくなかった。

二ナイはカンナよりも二つほど年上だ。カンナは彼女に子供の頃からずっと懐いていた。

初めて好きになった相手は二ナイだった。村長の娘はもともと強く勇敢な男が娶る決まりになっている。だから自分の想いが報われることはない。

そう知っていても、二ナイの前で弱い姿は見せたくなかった。

「ねえ、あそこまで言われて悔しくないの？」

ハクオウの人間は誇り高く、侮蔑を許さない。カンナだって同じだ。小さな頃から誇り高く、気高く生きると教えられてきた。

それでも自分の置かれた状況を考えれば、誰に何を言われても言い返すことは出来なかった。

自分は竜に乗れない。自分は空を飛べない。

「みんなの言うことが事実だからさ。俺は未だにヒカネに乗れない」「そんなの関係ない。みんながアナタを馬鹿にするんだから、怒ればいいのよ！ どうして黙っていられるの、男なのに！」

彼女まで、そんなことを言う。

どうしろというのだ？ 薄っぺらな誇りを守るために決闘でも挑

めば良かったのだろうか。自分の未熟が原因だと言うのに。

「ヒカネが駄目なら、他の竜に乗れば良いわ。かわいそうだけど、あの子は飛べないのよ。だからいつまでもアナタが馬鹿にされるんだわ」

ニナイは大きな勘違いをしている。たしかにヒカネは空を飛ぼうとしない。だがたとえ、相棒に選んだのがヒカネではなかったとしても無駄だ。

もし竜の背に乗れば、たちまちカンナの心は恐怖に縛られてしまう。仲間たちの前で醜態をさらして、初めての飛翔は失敗に終わる。臆病者と罵られながら生きるしかないだろう。たとえどんな選択をしたとしても、現状が変わったとは思えない。

全ての原因はカンナにあるのだから。

カンナは何も答えなかった。言えるはずがない。高いところが怖いなど、彼女に知られたくはなかった。

すると、彼女はそれまでの怒りをにじませた表情を止めて、切なげにため息を吐いた。

「わたし、嫌なの。アナタが誰かに馬鹿にされたり、そんなに辛そうにしてるのを見るのは」

「ニナイ……」

「どうして？ 昔はみんなと仲が良かったでしょう？ 竜に乗ったら、誰が一番狩りが上手か勝負するんだって……」

彼女は今も変わらない。まるでカンナの姉のように振る舞う。だからこそ余計に辛かった。

どうして彼女が悲しむのだろう。そんな顔は見たくなかった。小さい頃のカンナは、彼女に喜んでもらうことばかり考えていた。ニナイが笑ってくれば、それだけで嬉しかった。

それなのに今は、自分が彼女を悲しませている。

「明日こそ、飛んでみせるよ」

彼女を喜ばせたくて、そんな言葉を口にした。

「今までだって、ヒカネが俺を乗せようとしたことはあった……状

況が悪かっただけさ。たまたま邪魔が入ったり……だからきつと、明日こそは上手く行く。それで、みんなと一緒に狩りに出るんだ」

出来ない約束だということは、自分が一番わかっている。

「覚えてる？ 昔、ミラじいさんの言ってた大角イノシシの話。俺が見つけて、仕留めてくるよ。そしたら一番に二ナイに教えるから

……

┌

それでも少しだけ、彼女の表情が晴れた。だから今はそれだけで良かった。

その日の夜は、眠れなかった。

明日が最後だ。もし明日、ヒカネが飛ぼうとしなければ。飛翔の節は終わってしまう。飛翔節の間に飛ばなかった竜が、その年中に飛ぶことはない。

だから明日が最後。明日飛べなければ、また次の飛翔節……。

ヒカネは今日も変わらない。眠たげに首をもたげて、カンナが何を言っても動こうとはしなかった。

怒って見せても、懇願して見せても、ヒカネは動かない。

飛翔の節、最終の日。とうとう、カンナが竜の背に乗ることはなかった。

村の広場に、男たちと竜が集まっている。村の広場にはやぐらがいくつも組みまれ、炎が煌々と燃え上がっている。

炎を照り返しながら、竜たちが色とりどりの翼を自慢げに広げる。彼らはこれから始まる狩りの興奮に身を震わせている。

「去年の暖季は異常なまでに獲物が少なかったからな。今回こそ豊猟だといいが」

「心配はいらん。獲物の数が多かろうと少なかろうと、お前が仕留められる数は変わるまい」

「なに！ そこまで言うなら、賭けるか？ 俺とお前、どちらが多

く獲物を仕留められるか？」

「面白い。数だけじゃないぞ。俺ならお前以上の大物を仕留めてやる」

男たちは互いに対抗心を燃やしながら、自らの得物を念入りに確認している。彼らだけではない。広場に居る男たちの目は狩りの興奮に燃え、輝いていた。

カンナだけが、その輪に入れずにいた。まだ大人の仲間入りをしていない子供たちと共に、男たちを見送る側にいる。

彼と同じように育った若者たちが、初めての狩りに参加する。彼らは興奮と不安のない交ぜになった表情をしていたが、カンナを見ては鼻で笑い、軽蔑の眼差しを向けた。

恥ずかしさと怒りで拳が震えた。この場にニナイがないのがせめてもの救いだった。

村の娘たちは今朝から、オーダイ山に咲く喜願花を摘みに行っている。

喜願花は一年中色とりどりの花を咲かせる珍しい花だ。男たちが狩りに出ている間、村の若い娘たちはオーダイ山に登り喜願花を摘み取る。

そうして摘み取った花々で狩りの季節中、村を飾り立てる。狩りを終えて男たちが帰って来る頃には、村中が華やかに彩られているわけだ。

「なあカンナ。アシュミナと一緒に喜願花を摘みに行けば良かったんじゃないのか？」

「アシュミナも困るだろうよ。こんな出来損ないの兄に來られても足手まといになるだけだろう？」

男たちがゲラゲラと笑った。カンナは拳を握り締めて、広場に背を向けて立ち去った。

限界だった。これ以上馬鹿にされては黙っていられない。

飛んでやる。何があっても、無理矢理にでもヒカネを飛ばせてやる。

竜舎の扉は開け放たれている。今、中にいる竜はヒカネだけだ。他の竜はすべて、広場に集まっているのだから。

「起きろ、ヒカネ！」

敷き詰められた枯れ草の上で、ヒカネは小さく寝息を立てていた。自分よりも一回り大きいその体に、カンナは拳を叩き付ける。

硬い皮膚を何度も叩く。ヒカネは閉じていた目をパチパチと開き、非難するようにカンナを見た。

「飛ぶんだよ！ これ以上、馬鹿にされてたまるか！ 落ちこぼれだつて言われて、侮辱されて、悔しいと思わないのかよ！」

カンナの言葉を無視して、ヒカネは再び目を閉じる。

「誇りはないのかよ！ 飛べるんじゃないのかよ！？ どうして…どうして飛ぼうとしないんだよ！」

頭に血が上っているカンナはヒカネの背中を思い切り殴りつけた。拳の皮膚が裂け、血がにじむ。

途端、ヒカネが跳び起き、牙を剥き出しにして唸り始めた。

怒っている。牙の並んだ口を開き、カンナを威嚇する。腕を振るい、尻尾を振り回し、カンナを遠ざけようとする。

爪を地面に突き立て、今にも飛び掛かりそうだ。普段は半分に閉じられている目を鋭く細め、カンナを睨み付けている。まるで敵に向かう時のように。

落ちこぼれの竜はカンナを拒絶した。認めなかったのではない。

ヒカネはカンナを、敵として扱った。

決定的な離別。

もう互いの心が通うことはない。相棒として選んだ竜に、敵として認識された。

おしまいだ。

もはや竜の背に乗って飛ぶことはないだろう。

カンナはヒカネに背を向けると、一度も振り返らずに竜舎を出て行った。

「雲行きが怪しいのう」

窓枠に座って、ぼうつと空を見ていた。今にも一雨来そうな空模様だった。

「雨にならなきゃ良が。雨空を飛ぶのはひよっこ共にはちと厳しかろう。それにアシユミナたちもちようど、山に入った頃じゃに」

祖父の言葉は頭に入らなかった。カンナはただ、二度と届かない空を見ていた。

居間の壁にはびかぴかに磨き上げられた槍が掛かっている。父の形見だ。いつか竜に乗って空を飛び、父と同じように狩りに出る。その時にあの槍を使おうと思っていた。

それすらも、もう叶わぬ願いだ。

「なあカンナ。お前よう、なんのためにヒカネに乗るつもりじゃだ？」

聞こえてはいたが、何も答えなかった。

なんのためだろうと一緒だ。今更その質問に意味はあるのだろうか？ カンナは竜の背に乗れないのだから。

これからの長い人生、地を這って生きていかなければならない。

考えるだけで気分が滅入った。

いつそのこと村を捨てて出て行こうか。

それも悪くない。もうすぐ暖季が始まるとはいえ、まだ獲物の少ないこの季節だ。今ならオーダイ山に梟熊も出没しないだろう。

飛翔の節が終わり、本格的な暖季になれば、山越えは難しい。

いつだったか、寒季に旅の商人が村を訪れたことがあった。雪に閉ざされたオーダイ山を越えるなんて、村の人間には想像も付かなかった。

彼は街の暮らしについてカンナに教えてくれた。

たくさん民族が居て、たくさんの人が歩いている。いつでも活気に溢れていて、どんな人にも成功する機会が待っている。最先端の技術が街には溢れていて、オカネさえ持っていれば吹雪のオーダイ山ですら越える道具だって買えるらしい。

彼の語る街の様子はとても楽しそうだった。

なにより、街には竜に乗れないからといって認めてくれない者はいない。

妄想を振り切って、カンナはため息を吐いた。

それこそ、今更だ。

竜の背に乗って飛ぶ。大人たちに、仲間たちに認められる。それだけを目指に生きてきた。新しい価値観の中でやり直すなんて、自分には無理だ。

「竜は賢い生き物じゃ。ワシら人間よりよっぽど……心の奥底を見透かすんだで。魂うちゅうんじゃがね。じゃから簡単に人を認めん竜は普通の竜よりよっぽど賢いゆうことじゃ。ヒカネは体あちまいが、他ん竜子より優れてるでよ」

ヒカネが他の竜より優れている？

とてもそうは思えなかった。竜は空を飛ぶことを喜びとする。たとえカンナに見切りを付けたとしても、本当に竜として優れているなら、相応しい乗り手を求めて飛び立つてもおかしくはない。

それすらしないのは結局、空を飛ぶのにすら関心を向けないだけだ。竜ということではないだろうか。

「じいちゃん。ヒカネは俺を認めないよ。だからもう……無駄なんだ」

祖父に自分の気持ちは理解できないだろう。祖父は村一番の狩人だった。弓を引いても槍を持たせても、祖父の右に並ぶ者はいなかった。この村で唯一、梟熊を単身で仕留めたような腕前だ。

そんな祖父に、どうして自分の気持ちが想像できる？

一人になりたかった。同情も侮辱も、もう十分だ。

夜中のうちに、強い雨が降った。風がごうごうと吹き荒び、窓を叩いている。

何度も布団の中を転がる。眠気は少しもなかった。何もかも忘れて眠りたかったのに。

もう何度目になるかわからない溜息を吐いて、カンナは体を起こした。

今夜は眠れそうにない。嵐の音に耳を寄せる。ふと、暴風雨の音に混じって人の声が聞こえた気がした。

声は、気のせいではなかった。階下から誰かが自分を呼んでいる。こんな嵐の夜に、いったい誰が？

カンナは不審に思いながらも居間に降りた。蒼白な顔をした母が立っている。母は一人の少女を抱きかかえていた。

「アシュミナ……？」

妹の顔からは血の気が失せている。アシュミナは喜願花を摘み取りに行っているはずだ。よく見れば、暗い室内にいたのは母とアシュミナだけではなかった。喜願花を摘みに行っていた娘たちが全員、濡れねずみのままで居間に立っている。

ニナイだけがその場にいなかった。

娘だけではない。カンナの祖父とハクオウの村長も集まり、深刻な顔をしている。

さっきまで嵐の中を歩いていたのだろう。アシュミナの黒い髪からは水がしたり、着物もべつとりと濡れている。

泥汚れに混じり、妹の着物には赤い染みができている。アシュミナは怪我をしていた。

「お湯を沸かして。すぐに！ それから薬と、包帯！」

すぐに母の指示に従った。母はアシュミナの着物を脱がし、暖かく清潔な布を湯に浸して身体を丁寧に拭いた。

傷口を綺麗に洗うと、薬を塗り込む。傷が痛むのか、アシュミナは小さく苦悶の声を漏らした。

「大変…… 大変なの、ニナイが」

「喋らないで。すぐに傷の手当てをするから」

嫌な予感がした。どうしてみんながここにいるのだろう。それに、妹はこんな怪我まで負って。

どうしてニナイだけがないのだろう。

「ニナイが……私をかばって、崖の下に……！」

風がごうごうと吹き荒れている。悲痛な叫びを雨と風の音が押し流す。

「まだ崖の下にいるの！ 返事は聞こえた……でも動けないのよ！ 怪我してるのかも！ お願い、ニナイを助けて！」

アシュミナが悲痛な叫びを上げる。誰かのすすり泣く声が聞こえた。

「落ち着きなさい。いったい、何が起こったというのかね」

村長は冷静に聞いている。だが、一人娘のニナイだけが帰ってこないのだ。内心は穏やかではないだろう。

途切れ途切れになりながらも、彼女たちは状況を説明した。

昨晚、雲行きが怪しくなったのを見て雨をしのげる洞窟を目指した。夜中に嵐に遭遇してしまうのは厄介だ。

だが、山道を進むのは予想以上に時間が掛かった。すぐに雨が降り出し、やがて嵐がやってきた。

足下さえ覚束ない嵐の中を、手探りで一步一步進む。ニナイが先頭に立ち、彼女たちを励ましながら。

もう少しで嵐をしのげる洞穴にたどり着く。あとわずかというところで、ぬかるんだ地面にアシュミナが足を取られた。彼女は崖下へ転落しかけ、咄嗟にニナイが彼女の腕を取った。

ニナイは何とかアシュミナを引き上げたが、その際に自身が崖下へと転落してしまった。

嵐の立てる轟音の中、かすかにニナイの声が聞こえた。ニナイはまだ生きている。だが、今のままでは助けようがない。アシュミナも怪我を負っている。だから娘たちは、嵐の中を突っ切って村まで戻って来た。

「お願い……ニナイを助けて。わたしのせいなの……」

アシュミナは涙を浮かべている。寒さか恐怖か、小さな身体が震えていた。

「無理だ……誰が助けに行くというのだ？ 崖に落ちたというなら、

竜でも居らねば助けられまい。男たちは皆、狩りに出ておる。ましてやこの嵐。たとえ村に残っていたとしても、飛ぶのは不可能だ」
絶望そのものの声を村長が上げた。誰も、返事はしなかった。

村長の言うことはもつともだ。嵐の山を越えるなんて、竜にでも乗らない限りは無理だろう。それに、飛行に慣れている熟練の竜でさえ、嵐の中を飛ぶのは簡単ではない。さらに一人の人間を見つ不出すなんて、不可能に近い。

賢い人間なら、嵐が去るのを待つ。それが懸命な判断だ。

カンナは駆け出していた。驚く娘たちの脇を抜け、玄関の扉を開け放つ。

「どこへ行くの！？ カンナ！」

母の叫びを無視して、暴風と雨の荒れ狂う夜へと飛び出して行く。二ナイが取り残されている。嵐の山に、たった一人で。

「ヒカネ！」

竜舎の中、ヒカネは体を起こしていた。

開け放たれた扉から、雨の滴が入り込んでくる。ヒカネは舞い落ちる雨をじいつと睨み付けていた。

「頼む……頼むヒカネ、力を貸してくれ。一度だけで良い。もう二度と俺を背中に乗せなくていい。だから頼む……二ナイを助けに行くんだけ、力を貸してくれ！」

ヒカネが咆哮した。振り上げられた前脚がカンナを打つ。あまりの衝撃にカンナは倒れ、ごろごろと床を転がる。

体を丸めて咳き込んだ。頭を打ったらしい。手で触れてみると、こめかみが切れてぬるりと血が流れていた。痛みで震える足で何とか立ち上がると、カンナはヒカネに向き直った。

「気に入らないなら、俺を殺しても良い……だから頼む、一度だけで良いんだ！ 俺を認めなくていい！ 二ナイを助けるために、力を貸してくれ！」

ヒカネが丸い目で、カンナの目を覗き込む。カンナは黙ってその

瞳を見返した。

「二ナイが崖の下に取り残されてる。助けられるのは俺たちしかない。俺たちが行かないと……二ナイが、助からないかも知れない」ヒカネは大きく息を吸い込み、竜舎を震わせるほどの咆哮を上げた。先ほどとは比べものにならない、空気を振動させる竜の咆哮。前脚の爪を地面に突き立て、首を下げる。搭乗者を待つように、その姿勢で止まった。

まるで、カンナの覚悟を試しているかのようだ。

「ヒカネ……!？」

ぎゃう。短い鳴き声で応える。

乗りたいのならば乗れ。カンナにはヒカネがそう言っているのがわかった。

カンナは意を決すると、竜舎の壁に掛けてあった槍と手綱を取る。ヒカネの首に手綱を駆け、しっかりと槍の両端に固定する。

桜色の背にまたがった。ヒカネが突然身を起こし、カンナは慌てて手綱をたぐった。手綱を絞り、槍を身体にぴたりと寄せる。

ヒカネは気合いの雄叫びを上げると、一気に竜舎の外に駆け出す。カンナが心の準備をする間もなく、ヒカネが大きく翼をはためかせた。

初めて体験する浮遊感。内蔵が浮き上がるような感覚。翼の一打ちごとに、村が小さくなっていく。

雨の音と風の音。時々、ヒカネが上げる鳴き声。それ以外は何も聞こえない。

夜の闇に隠されて、眼下の村はもう見えない。雨粒と霧でヒカネの顔すら見えなかった。

不思議と、恐怖はない。喜びすらない。悲願を達したというのに。自分が空高く飛び上がっているのだと思っても、何も感じなかった。見返したい。認められたい。そんなくだらないことはもう頭になかった。

心を占めるのはただ一つ。

今は、二ナイを助けるために。

「ヒカネ！ 東に向かってくれ！」

応えるように、ヒカネが一際大きく翼を打った。途端に加速が始まり、体が背中から引つ張られる。振り落とされないよう、寒さに震える指でヒカネの首を掴んだ。

目の前も見えない暴風雨の中を、放たれた矢のようにヒカネは飛ぶ。並の竜であれば風に翻弄され、飛び上がることもすらできなかっただろう。

風を切る疾走感。横殴りの冷たい雨がカンナを打つ。ヒカネの硬い鱗をぎゅっと掴んだ。鱗に包まれていない柔らかい皮膚を通じて、ヒカネの体温を感じた。竜の心臓が燃え立つように鼓動を打っているのがわかる。

ヒカネが羽ばたきを止め、一気に高度を下げる。内蔵が浮かび上がり、落下する浮遊感。カンナは目眩を覚え、しっかりと手綱を握り直した。

雨は徐々に弱まっている。先ほどまでカンナたちを襲っていた激しい雨が、今はまとわりつくような霧雨に変わっている。

闇の中で目を懲らすと、うつすらと山の影が見えた。険しい山々が霧雨の向こうに霞んで見える。

喜願花の咲く場所なら知っている。そこまでの道を徹底して搜索するしかない。この雨では二ナイたちの足跡も消されているだろう。手遅れになる前に、探し出す。

「行こう、ヒカネ！」

とん、と軽くヒカネの首を叩く。了解とばかりに翼をはためかすと、一瞬でヒカネが加速する。

不幸中の幸いか、雨と風がますます弱まっている。雲の切れ間から、わずかに月の光が覗いていた。

ふと視線を下に向ける。真っ白い靄の先、巨大な木々のてっぺんが遙か足下に見える。

くらり、と頭が揺れた。

かつて経験したことないほどの高所にいる。その事実を認識した途端、全身に悪寒が走った。

身体が小さく震える。寒さではなく、恐怖から。

手綱を握る手に力が入らない。雨の音も風の音も遠ざかっていく。何も聞こえない。自分は今、どこにいる？ 遙か上空に……

おおおおおおん

ヒカネが吼えた。空気を振動させ、闇を切り裂き、遙か彼方まで響く咆哮。山の向こうから驚いた鳥たちが一斉に飛び立っていく。まるでカンナを励ましているように感じた。いや、情けない相棒を叱咤してるのかも知れない。

「ニナイを……ニナイを助けるんだ！ 行くぞヒカネ！」

「ぎい」と短くヒカネが応える。山の斜面ぎりぎりを高速で進む。

恐怖は残っていた。だが、それ以上の勇気が今はある。

自分は一人でいるわけではない。ヒカネが共にいる。だから大丈夫だ。

雨が止んだ。千切れた雲の隙間から、月の光が注いでいる。稜線の向こう側で、山が白み始めるのが見えた。夜明けが近い。

ヒカネがゆつくりと高度を落とす。木々が途切れ、開けた地面へと着地した。

まるで犬のように、ヒカネはくんと地面の匂いを嗅ぐ。

「……わかるのか？」

問いかけると、ヒカネは首を傾げて見せた。じいっとまっすぐに霧の向こうを見ている。人間二人分はありそうな大きな木が半ばから折れ、倒れていた。まるで巨人の手でへし折られたかのようなのだ。

ヒカネが再び翼を打つと、木々の合間を縫うようにゆつくりと進んだ。時々着地しては、また周囲を見回しながら匂いを嗅いでいる。「この先だ、ヒカネ。喜願花が咲いている場所は……」

崖から滑り落ちたとアシュミナは言っていた。話を聞いて、彼

女たちがどの辺りまで進んでいたのかは想像が付く。だが、やはり簡単には見つけれなかった。

ニナイが落ちてから、どれだけの時間が経っているだろう。手遅れとは思いたくない。

更に進むと木々が途切れ、片面が崖になっていてる地点にたどり着いた。朝の太陽が山の向こうに姿を現し、薄もやを見通す光を与えてくれた。雨でぬかるんだ地面を念入りに確認する。足跡は残っていなかったが、何かが滑り落ちたような形跡が見て取れた。

「この下だ！」

言い終えるよりも早く、ヒカネが飛んだ。翼を広げて滑空しながら、崖の下へと降りる。

ずしん、と足音を響かせて着地する。

「ニナイ！ どこだ、ニナイ！」

周囲を見回しながら、声を張り上げる。耳をすませて待つが返事は聞こえない。

空気を振動させるような大音声で、ヒカネが吼える。

ガサリ、と近くの茂みで何かが動いた。青々と茂った葉の中に、人が倒れている。

「ニナイ！」

カンナは慌ててヒカネの背を降りると、茂みに近付く。

弱々しく、潤んだ瞳でニナイがカンナを見た。

全身ずぶ濡れで、頭から血を流している。ところどころ衣服は裂け、切り傷や擦り傷だらけになっていた。顔は生気が失せて真っ青になっている。嵐の中を何時間もいた為、全身が冷えて冷たくなっていた。

「カンナ……？」

「もう大丈夫だ。助けに来た」

足が酷く腫れている。折れているのかも知れない。服の裾を千切り、適当な添え木を当てて固定する。痛みにニナイが顔をしかめた。
「どうして……ここに？」

「いいから、じっとしてて」

頭の傷口を見る。傷は深くない。血も止まっている。雨のせいで流れた血が滲んでいたようだ。こびりついた血を拭くと、二ナイの身体を抱き上げた。

ヒカネの背中に二ナイをそつと乗せる。手綱から槍を外し、二ナイが落ちないようにしっかりと手綱を腰に結びつけた。

竜の背中は二人で乗るには小さ過ぎる。問い掛けるようにヒカネがカンナを目を見た。その背中を優しく叩く。

嵐の中を無理に飛んだのだ。ヒカネの身体にも相当の負担が掛かっている。

「二ナイを連れて戻ってくれ。行けそうか？」

ぎゃう、とヒカネが短く返事を返す。

カンナが思っていたよりも、ヒカネはずっと優秀な竜だった。もし他の竜を選んでいたら、嵐の空は越えられなかっただろう。

だが、このまま二ナイを送り届けて再び戻って来るのは困難だ。竜の身体は鳥のように、何時間も何日も飛び続けられるようには出来ていない。利口なヒカネのことだ、自分の身体のこととは一番わかっている。

山を降りるのはカンナ一人の力でやるしかない。

ヒカネは頭をカンナの胸に擦り付けた。竜が信頼する者だけにする、愛情表現のようなものだ。ほんの先日まで心を通わせずにいたというのに、ヒカネは今、カンナに心を開いている。それが何よりも嬉しかった。

ヒカネが翼をはためかせようとした途端、空気をつんざくような咆哮が響く。

声の主はヒカネではない。狼の遠吠えのような、鷲の鳴き声のようなその声は、離れた場所から聞こえた。

朝もやの向こう、何かが近付いて来る。ズシン、ズシンと足音が響いた。

不穏な空気を感じ取ったのか、ヒカネが牙を剥き出しにして唸る。

心臓の鼓動が早くなる。嫌な予感がした。胸を締め付けられるような感覚。寒気がするのは、冷たい風雨の中を飛んでいたからではない。

両手で槍を握り、構えた。

震動音は徐々に大きくなる。葉をなぎ払い、木々の向こうからソイツは姿を現わした。

鋭いくちばしに、不気味な丸い目。暗褐色の毛に覆われた巨大な獣。梟のような頭を持つ大熊。

カンナの二倍はある大きな梟熊が、血走った目でカンナたちを見つめた。

フクロウグマ
「梟熊!？」

くちばしを曇天の空に向け、甲高い声を上げる。飢えて血走った目は、カンナたちを獲物として捉えていた。

まだ早い。まだ冬眠しているはずだ。混乱しながらも、カンナは動いていた。

「飛べ、ヒカネ!」

叫ぶと同時に、駆け出す。

梟熊は凶暴で雑食だ。木の実を食らい、魚を食らい、虫を食らい、獣を食らう。だがまだ暖季が始まりもしないこの時期に十分な食料は得られない。冬眠中の蓄えが得られずに起き出してしまったのだらう。

腹を空かした梟熊はどうするか？ 人里に降りて人間を食らい、竜を食らう。

梟熊が後ろ足で立ち上がり、両手を振り上げて威嚇する。カンナは怯むことなく接近し、胴を一突きした。

渾身の一撃だが、硬い皮膚と分厚い毛皮をわずかに傷付けたただけだ。梟熊は怒りのうなり声を上げ、鋭い爪の伸びる両手を振り回す。「ニナイを連れて逃げる!」

ヒカネが飛び上がることを確認せず、カンナは叫んだ。

梟熊の爪が木の幹を砕き、地面をえぐった。竜の硬い鱗ですら、

易々と切り裂く爪だ。一度でも食らえば、人間の身体など無事では済まない。

「駄目……ヒカネ、戻って、お願い！」

上空で二ナイが叫ぶ声が聞こえる。羽ばたきの音。薄明かりの空に緋色の影が飛んでいくのが見えた。

梟熊がすさまじい素早さで駆け出す。カンナは反転すると全速力で走り、梟熊に追いつかれる前に木をするすると登った。

巧みに樹上に姿を隠す。梟熊が苛立たしげに吼え、木の幹に突進する。木がぐらりと揺れ、危うくカンナは落ちそうになった。

梟熊は真正面から対峙して仕留められるような獲物ではない。大人が何人も束になり、しっかりと準備をして倒すものだ。

だがカンナは知っていた。祖父が梟熊を仕留めた方法を。子供の頃から何度も繰り返し、その武勇伝を聞かされて来た。

自分にも出来るだろうか？ いや、やるしかない。できなければ、殺されるだけだ。

カンナは穂先を下に、槍を構え直した。梟熊がカンナの登った木を折ろうと、丸太のような両腕で巨木を掴んだ。

ミシミシと幹の砕ける音が聞こえる。梟熊の怪力を持つてすれば、巨木の幹をへし折ることなんて造作もないだろう。いつまでも木の上に隠れているわけにはいかない。

爆発しそうなほど、心臓が鼓動を強く打っている。身体中の血液が燃え上がり指の先まで熱かった。

汗で滑らないようにしっかりと槍の柄を握りしめる。

覚悟を決め、枝からカンナは飛び降りた。上を向いている梟熊の顔面に向けて、全体重を乗せて槍を突き刺す。

鮮血が散った。皮膚を引き裂き、肉を突き刺し、骨を砕く感覚。衝撃に耐えきれず、槍の柄が半ばからべきりと折れる。

落下の勢いを殺しきれずにカンナは地面を転がった。泥塗れになりながら、素早く身体を起こす。

梟熊の巨体が倒れている。顔面から胴に掛けて、真っ赤な血が毛

皮を濡らしていた。

顔を刺し貫き、首の骨を砕いた。どんなに梟熊が頑丈で、どんなに生命力が強かろうと、これで生きていられるはずがない。

両足が痺れていた。落下した時にぶつけた肩が酷く痛む。肺が焼け付くように熱く、頭が痛い。戦いの興奮に、手が震えている。

二つに折れた槍が転がっていた。血塗れの穂先はぐにやりと曲がり、使い物になりそうもなかった。

恐る恐る倒れた梟熊に近付く。ぴくぴくと痙攣しているが、動き出す気配はない。梟熊は完全に息の根を止めている。

自分が仕留めた。大人が束になっても叶わないような凶暴な獣をやった――

喉から漏れかけた歓声は、すぐに消えた。

茂みの奥に、一對の赤い眼差しが光っている。

梟熊がもう一匹、木々の向こうから姿を見せた。

ヒカネは凄まじい速度で空を駆け抜ける。二ナイは目も開けられず、振り落とされないようにするだけで精一杯だった。

二ナイが手を離しそうになるたび、ヒカネは敏感にそれを察知して速度をゆるめた。しっかりと手綱を握ると、再び速度を上げる。

励ますようにヒカネが吼える。ごうごうと耳元で唸る風音に混じり、ヒカネの鳴く声が聞こえた。

やがて眼下に藁葺きの屋根が見えた。上空から見るのは初めてだが、二ナイが生まれ育った家に間違いない。

赤い屋根の風車小屋が見える。竜舎が見える。遠くに大きく口を開けた谷が見える。背の高い木々がどこまでも続いている。オーダイ山の向こうから、立ち上る太陽が見えた。

村の男たちは皆、この景色を見たのだろうか。

ゆつくりと村の広場に着地した。ヒカネがくずおれるように地面に倒れ伏す。翼を広げたまま、くたりと頭を地面に預ける。

初飛行で嵐の中を飛んだのだ。相当な無茶をしたに違いない。

「ありがとう、ヒカネ」

ヒカネの首を撫でながら、二ナイが呟く。足の痛みを堪えながら、その背中を降した。激痛が走り、思わずヒカネの横に倒れ込んだ。身体中が痛い。寒気がして、立っているのもやっとだった。

このまま気を失ってしまいたかったが、まだそれはできない。

ヒカネがよろよろと頭を上げると、空に向かって吼えた。寝ぼけた鶏たちがヒカネの声に驚き、騒ぎ始める。

声を聞き付けた村人が玄関の扉を開けて広場を見る。ヒカネと二ナイの姿に気付くと、慌てて広場に駆け寄って来た。

村の人間たちが集まり始めた。カンナの母と祖父もそこにいる。アシュミナは無事に戻ったのだろう、カンナの母は優しく二ナイを抱きしめた。

安心した途端、涙がこぼれそうになった。だが今はまだ、泣いている場合ではない。

「大変なの……カンナを、カンナを助けて！」

どくどくと血の流れる腕を抑えながら、カンナは荒い息を吐いた。爪の先がかすめただけで、深く肉をえぐられた。切り裂かれた右腕から血が流れ、止まらない。裂いた服の裾で二の腕を強く縛り、流血を抑えようとする。激痛で意識が飛びそうになった。

ガリガリと何かを削るような音と共に、甲高い梟熊の吠え声が聞こえた。

カンナは裂けた岩の合間に身を隠していた。だが、逃げ場はない。梟熊が何度も岩の周りをぐるぐると周り、狭い隙間に鋭い手を入れ、カンナを捕まえようとしている。梟熊の爪が岩にぶつかる度に、ガリガリと不快な音が響いた。

今にして思えば、今年の暖季は食料が少なかった。

山の獲物もわずかししか獲れず、畑の食べ物も少なく、山菜もほとんど採れない。ひもじい思いをしたのは人間だけではない。梟熊も食料を得られず、暖かくなる前に蓄えが底を尽きたのだらう。

梟熊からすれば、カンナはようやくありつけた餌だ。そう簡単に諦めるとは思えない。

梟熊の恐ろしさの一つはこの執念深さにあった。一度見つけた獲物は、たとえ自らが死に掛けても決して逃がしはしない。絶命するか、相手を食い殺すまでは追い詰め続けるのだ。

昨晚の嵐が嘘のように、明けの空から太陽の光が差し込んでいた。こうしていても失血は抑えられない。時間が経てば経つほど、徐々に死に近付いている。

手元にあるのは二つに折れた槍の穂先。ひしゃげ、梟熊の血がこびりつき、もう麻布でさえ引き裂けそうにない。

何とか逆転の手立てはないだろうか。目を狙って怯ませる？ 必殺を期待して、くちばしの中を突き刺す？

どちらも現実味はなかった。岩の隙間から抜け出せば、すかさず梟熊の豪腕で頭を割られるだろう。あとは肉を鋭いくちばしでついはまれるだけだ。

このまま出血で死ぬか、梟熊に食われるか。

「くそ……死んでたまるかよ」

自らを奮い立たせるように言い聞かせてみても、こうして身を隠す以外に何も出来なかった。逃げ出すという選択肢はない。もし運良く山を降りるまで逃げ切れたとしても、梟熊を連れて村に戻るわけにはいかない。被害が拡大するだけだ。

イチかバチか、飛び出すしかない。身を隠したまま失血死するくらいなら、勇敢に戦って戦士として死にたかった。

誰もカンナを臆病とは思わないだろう。梟熊を一匹仕留め、二匹目に戦って殺されたのなら。

痛みを堪えながら、折れた槍の柄を口でくわえる。無事な左手で近くの石を掴み、岩の隙間から顔を覗かせる梟熊に投げ付けた。

怒りの唸り声を上げ、再び梟熊が手を差し入れて来る。カンナは身をひるがえすと、裂け目の反対側から飛び出した。

もう一度、今度は折れた槍で同じ芸当をするしかない。手近な木

に駆け寄ると、幹を掴んで身体を引き上げようとする。

だが、すでに右手は痺れて感覚がなくなっている。左腕も意志とは無関係に痙攣を始め、力が入らない。足が痺れて、走るのがやっとだった。血を失い過ぎた。視界が暗くなり、頭がくらくらする。

駄目だ、もう樹上に逃れるだけの体力もない。岩を回り込んだ梟熊がカンナを見つけ、突進してくる。

やられる――

そう覚悟した瞬間、緋色の影が視界をかすめた。空中から飛来したソレは梟熊の巨体にぶつかり、梟熊がごろごろと地面を転がる。

「ヒカネ！」

ぜえぜえと荒く息を吐きながら、ヒカネが梟熊とカンナの間立ちふさがった。体力の限界はとうに越えているのだらう。ふらふらと翼を広げ、威嚇するようにうなり声を漏らした。

ヒカネの背中には誰も乗っていない。カンナを助ける為に単身、再び空を越えて戻って来たのだ。

立ち上がることにすら困難な状況で、それでもヒカネは懸命に牙を剥く。爪を地面に突き立て姿勢を低くし、今にも梟熊に飛び掛かるうとしている。

背中には新品の手綱と槍がくりつけられていた。カンナは震える腕でその槍を取った。使い古された槍だが、丁寧に手入れをされ、ぴかぴかに磨き上げられている。かつてカンナの父が使っていた槍だ。

祖父が母がヒカネに託したのだらう。竜のいないハクオウにはカンナを救える者はいない。

いるとすればそれは、相棒のヒカネだけだ。

折れた槍を投げ捨てる。父の槍を手綱から外し、構えた。穂先を前に向けて、しっかりと柄を脇に挟む。

ヒカネが戦意に昂揚した瞳をカンナに向けた。

「お前が相棒で、良かったよ」

もう駄竜だとは思わない。誰にも侮辱はさせない。カンナとヒカ

ネは勇敢な戦士と勇敢な竜だ。

梟熊は突然の邪魔に気分を害したのか、くちばしを力チ力チと噛み合わせて怒りを露わにしている。

巨体に似合わぬ機敏な動きで、梟熊が突っ込んできた。ヒカネが迎え撃つように飛び掛かる。梟熊の鋭い爪がヒカネの肩に食い込み、血が飛び散る。一撃は肩を突き刺し、背の翼を半ばまで引き裂いている。

ヒカネは苦悶の声を上げながらも自らの爪を梟熊の首に食い込ませた。負けじと梟熊が頭突きのように頭を振り下ろし、尖ったくちばしをヒカネの首に突き刺す。

カンナが叫び声を上げながら、槍ごと梟熊にぶつかっていく。腹部の硬い皮膚に食い込んだ刃先を、押し込めるように体重を乗せる。少しずつ食い込む刃。梟熊が痛みにも身をよじり、腕を振るった。

梟熊の丸太のような腕がカンナの右腕にぶつかる。激しい衝撃。感覚を失った腕に焼け付くような痛みが蘇った。

投げ捨てられた小石のように、何度も地面を転がる。

咳き込み、血を吐き出した。殴りつけられた右腕がおかしな方向に曲がっている。止血の為に縛った布は、止めきれない血で赤黒く変色していた。傷口からは折れた骨が見えている。

激痛に頭からつま先まで支配されていた。声を上げることもできない。視界が真っ赤に染まり、どくどくと血管が脈打つ音しか聞こえない。

それでもカンナは立ち上がろうと、歯を食いしばった。砂と泥塗れになりながら、震える足で立ち上がる。力を込めすぎた歯が砕け、血の混じった唾を吐く。

ヒカネが梟熊の首筋に噛み付いた。梟熊が悲鳴を上げ、両腕を滅茶苦茶に振り回す。爪がヒカネの身体を掠める度に赤い血が宙に舞った。

腕の一本くらい、なんだ。ヒカネが戦っているのに自分が倒れるわけにはいかない。たとえ腕を失ったとしても、ヒカネを見捨てる

わけにはいかない。

ヒカネが咆哮する。鮮血が吹き上がった。引き千切られた翼が地面に落ちる。

カンナが応えるように吼える。勢いを付けて駆け出すと、梟熊に突き刺さったままの槍を掴んだ。残された力を振り絞り、強く強く槍を突き刺す。皮膚を突き破り、肉に深く食い込んでいる槍を引き抜こうと、梟熊が身をよじった。

ヒカネの桜色の鱗は真つ赤な血で染まっている。苦しげに息を吐きながらも、瞳に宿った戦意は失われていない。カンナが血を流せば、ヒカネが梟熊に牙を突き立て、ヒカネが一撃を受ければカンナが槍を梟熊の身体に深く差し入れる。

互いが互いを守るため、限界を超えて戦い続けた。

すでに梟熊の動きに機敏さはなく、弱々しく腕を振り回して抵抗するだけだった。諦めて逃げ出そうともせず、折れた爪を必死で振るう。

ヒカネが渾身の力で梟熊にぶつかる。倒れた梟熊にカンナが飛び乗り、思い切り槍を押し込んだ。

ずぶり。筋肉を突き破り、内臓を貫く。それでも決して力を緩めず、背から貫通するまで槍を突き刺した。

消え入るような断末魔の絶叫。梟熊は二度、三度と腕を痙攣させ、そのまま動かなくなった。

糸が切れるように、ヒカネが地面に倒れ込んだ。カンナがヒカネに寄り添うように倒れ、労うように血塗れの鱗を優しく撫でた。

ヒカネの背中に頭を預ける。ヒカネが首を伸ばし、頭をカンナの腹に擦り付ける。ヒカネが弱々しく鳴いた。カンナは微笑み掛け、その頭を撫でてやった。

ヒカネは気持ちよさそうに目を細める。

太陽は中天に登っている。空には雲一つもなかった。太陽の眩しさに目を細める。何かが太陽を遮り、影を作った。カンナは目をつむり、意識が暗闇に飲まれていくのに任せた。

どこか遠くで、竜の鳴く声が聞こえた。

ハクオウの谷には古来より、竜が暮らしている。

険しいハクオウの谷と山、天を突くほどの巨木に囲まれた大自然。その中に小さな集落があった。

名も無きその村は単純に谷の名前を取って、ハクオウの村、ハクオウの里と呼ばれている。

ハクオウの村にはある一つの決まり事があった。

村に生まれた男子は皆、幼少の頃に相棒となる竜を選ぶ。

選んだ竜と共に育ち、背を預けられるに値すると認められれば、その背中に乗ることができる。

寒季と暖季の変わり目、飛翔節。その季節に竜の背に乗り、共に空を自由に飛べれば、ようやく一人前の男として認められるのだ。今年もまた多くの少年たちが竜の背に乗り、大空に舞い上がった。大人たちと共に狩りに出た彼らは、たくさんの獲物を獲って戻った。昨年以上の豊猟に、男たちは皆、喜色満面の笑みを浮かべている。

戦士を出迎えたのは、村の戦士としての役目を終えた老人、村を守る女、そして将来大人たちの仲間入りをするであろう子供たち。その中に、彼らの姿はあった。

美しい桜色の鱗を持つ竜と、精悍な顔つきをした一人の青年。

彼らは空を飛べない。竜には片方の翼がなく、青年は右腕が動かせなかった。

二人は飛翔の節に飛んだことがない。大人たちと共に狩りに出たこともない。彼らが空を舞ったのはたったの一夜、その一度きり。それでも彼らは、最も勇敢なハクオウの戦士として周囲から認められていた。

いくつもの季節が巡り、たくさんの少年たちが竜と共に空を舞っ

た。

長い人生で一度しか空を飛べなかった二人の名は、永く永くハクオウの子供たちに語り継がれた。

最も勇敢なハクオウの戦士として。いつまでも人々の記憶に残り続けた。

（後書き）

だけどわかるぜ熱い友情シリーズ。なんだそりゃ。

ロボットと人間の絆とか、動物と人間の絆とか、そういう話しは大好きです。

色々あって小説が上手く書けなかった最近、とりあえず何も考えずに書き出してみようと思って書き出したのがコレです。

普段から小説を書き始める時、別にテーマとか考えずに書き出します。

でも案外、完成してみると「この小説はコレがテーマなんだなあ」ってのがあつたりします。

今回のテーマは「価値観の変化」ですかね。たぶん。

「コレだけが俺の生きる道なんだ！」と信じていたものがなくなっても、案外幸せな人生を送れるかも知れませんよ。

まあ、私は小説家だけが自分の生きる道だと信じて進みますけども。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3554o/>

飛翔節

2010年10月16日23時25分発行